

文化財レスキューにおけるトリアージ

Triage and Rescue for the Cultural Property at the Kyoto Basin

高橋 学

Manabu TAKAHASHI

1. はじめに

現在、大半が更新世河岸段丘や完新世段丘に立地する旧平安京城における災害を考えた場合、水害のおそれは少なく、火災もしくは地震に伴う火災による被害が最も懸念される。

2. 現在に残る平安京

実際に、現在存在する旧平安京内の建物は、平安時代建造のものは無く、鎌倉時代に建立された千本釈迦堂が最も古いといわれている(図 1)。また、観光客が京都のシンボルのように眺める東寺の五重塔は、江戸時代徳川家光の時代の1644年に再建されたものであるし、清水寺の本堂もほぼ同じ時代に再建されたものである(図 2)。また、現在は寺町通御池下ル下本能寺前町にある本能寺は、明智光秀が信長を暗殺した四条西洞院、油小路、小角、錦小路に存在した本能寺とまるで別物である。

さらに、当初、千本丸太町に存在した御所は、里内裏として何度かの移動を経た後、1331年に土御門東洞院殿として現在の位置に移った。これすら江戸時代だけでも8回再建されている。そのうち、6回は火災によるものであり、現在の御所は1855年に再建されたものである。まして、鹿苑寺金閣は、三島由紀夫の小説にも描かれたように1950年の放火のあと再建されたものである。そして、最近、観光客の間でブームになっている京町家の大半は幕末から明治時代に属する建造物である。

他方、京内ではないものの、多くの観光客が訪れる坂本龍馬ゆかりの伏見寺田屋は、坂本龍馬が利用



図 1 千本釈迦堂



図 2 東寺五重塔

したものとは異なり、火災の後に別の場所に建造されたものであることが知られており、場所も建物も当時のものとは異なる。

また、条坊制の名残と言われる方形の道路網も豊臣秀吉によって都市の大改造が行われた結果であり、御土居や東西の寺町など、都を城下町に変貌させようとした痕跡が、現在、あちこちに認められる。例えば、旧二条城の石垣や御土居の中には、一石五輪塔や地藏菩薩など中世の石造物が使われている。当初、これらについては石材不足を補うものという見方があったが、

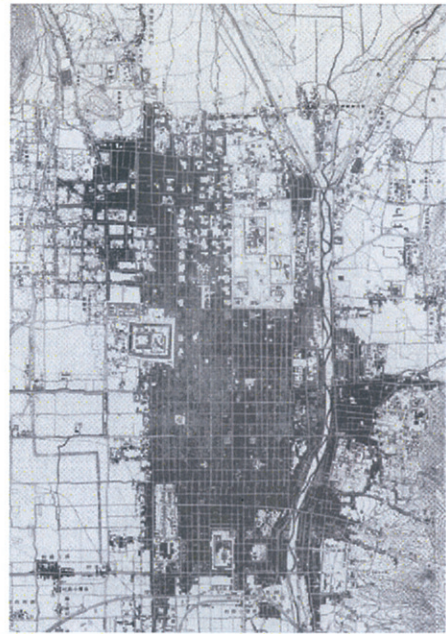


図3 御土居

最近では、中世的権威の否定を意味するような見方が支持されている。秀吉が城下町として築造した範囲は、御土居として現在でも残存しており、近世や近代の京都の地図をみると、この御土居の内側がいわゆる洛中であったことがわかる(図3)。

京都は平安時代から「都」であり続けたために、常に時代の先端を行く場所であり、度重なる街の改造を経て現在に至っているのであり、決して平安京が残存しているわけではない。

その中で、観光客を惑わすのは、社寺仏閣の伽藍の築造年代が新しいものであるにも関わらず、その中に安置されている仏像の年代が古いことである。仏像の年代が平安時代であるにもかかわらず、それを安置している建物は江戸時代のものであることも、しばしばみられることである。

3. 景観の保護

そこで、文化財を守るといった場合、広い意味の景観を守るといった場合もあるであろうし、不動産としての寺社仏閣の伽藍を守るといった場合もある。また、それに順ずるような容易には運べない仏像や壁画などもある。さらには比較的容易に運び出せる仏像や仏具、絵画、書類などもある。

広い意味の景観を考えるならば、京都盆地に平安京が置かれた8世紀末には、京都の周辺の山々はカシ、シイ、クスノキなどの常緑広葉樹に覆われていた。これが中世になると大原女たちのように生活の燃料としての薪を京内に売り歩く商売が成り立つようになり、周囲の山々の植生も二次林のアカマツへと変化した。アカマツは常緑広葉樹が伐採されたり山火事にあたりしたところに生える二次林であり、日当たりがよく、土地が乾燥し、痩せているところにしか生える事ができない。そして、その根元に生えるマツタケはアカマツの元気の良い時に豊作となる(図4、図5)。



図4 金閣寺付近の植生



図5 マツタケ狩り (白川)

近世、近代を通じて京都盆地の周辺は燃料の大消費地を控えてアカマツが卓越したが、第二次世界後の燃料革命により、現在は再びシイを中心とした原生林へと戻りつつある。仄聞によれば、京都府営林署は常緑広葉樹で被覆された山々を京都らしくないとして、常緑広葉樹の伐採計画を立てているというが、まさしく植生史を無視した愚昧な考えといわざるを得ない。

4. 景観と文化財

木彫で国宝第一号に指定された広隆寺の半跏思惟像は、当時日本には少なかったアカマツを材料としていることから、朝鮮半島の新羅で作られた物と考えられていたが、大きく抉られた内繰りの背板にクスノキが使用され、背部の衣文もこれに彫刻されていることが判明した。重要な部分に使われており、常緑広葉樹のクスノキは朝鮮半島には存在しないことから国産であるとの見方にかわってきている。

5. 文化財保存の第一歩

これらの文化財を守る場合、その方法は一つではない。しかし、まず行わなければならないのは、不動産や不動産に順ずるものを含めた文化財の財産目録である「資材帳」作りであろう。この資材帳には最低限「文化財の名称」、「文化財の保管場所」、「文化財の価値評価」、「文化財保護手段」などが記されている必要がある。そして、このデータは所轄の消防署、行政の文化財保護部門、それに所有者の3者が共有している必要がある。また、災害時の混乱を考えるならば「文化財の保管場所」ごとに文化財を整理したデータベース、「文化財の価値評価」ごとに文化財を整理したデータベースが必要であろう。そして、それらが文化財について詳しくない消防士などにも明確に判るように、トリアージタグのようなものによって記されねばならない(図6)。また「救護記録」にあたるデータも必要である(図7)。

トリアージは、本来、「医療資源(医療設備規模、医薬品備蓄数、医療スタッフ数、救急車台数、受入可能医療機関数など)より「発生傷病者数」が著しく多いという、極限の状況下において、「誰に優先的に医療資源を投下するのか」という「命の選択」を行うものであり、「全ての患者を救う」という医療の原則から見れば例外中の例外と言え、大地震や航空機・鉄道事故、テロリズムなどによる大量負傷者が発生したときのような、医療機関のキャパシティが足りないことがきわめて明らかな極限状況においてのみ是認されるべきものである。

5.2 文化財レスキューのトリアージ

さて、文化財レスキューのトリアージについて検討する場合、特別天然記念物などの一部を除き生きていないし、自ら苦痛を訴えることも無い。さらには、自ら移動できるわけでもないことが前提になる。また、その判断を決めるのは医療関係者ではなく、文化財所有者であったり、文化財有識者、あるいは事前に決定されている国宝、重要文化財などのランキングであったりする。

さらに、補修や修復については、時間をかけて行うことができる。それでは災害の現場においては、どのようなことが問題になるだろうか。

まず、誰が、どのような順で安全な地域に文化財を運びだすか。多くの場合、災害現場には文化財有識者はほとんどいない。基準となるのは国宝、重要文化財などの指定がひとつ。しかし、搬出にあたる消防士たちは、一般に、これらの識別する訓練を受けていない。そうすると、搬出基準を決めるのは文化財所有者ということになる。ここで、事前に作成された資材帳や文化財トリアージタグが役に立つ。

黒タグ

救出に現況以上の機材・人員を必要とし救出不可能なもの。

赤タグ

最も重要な文化財で救出の可能性があるもの。

黄タグ

重要な文化財で早期に救出が必要なもの。

緑タグ

文化財であってもその価値はさほど出なく、救出が可能な場合に救出するもの。

このような文化財トリアージは、震災や火災などの異常時に緊急に判断するもののほか、人命と違って、国宝、国の重要文化財、都道府県の指定文化財、市町村の指定文化財、未指定の文化財と言うように日常的に判断しておくことができるものもある。日常時に判断しておけるものについては、予め格づけができ、災害予防設備のととのった宝物館などに保存しておくことも可能である。しかし、仏像のようなものの場合、信仰の対象でもあり文化財としての指定をうけて宝物館に保管する事を所有者が拒否している場合も珍しいことではなく問題である。また、建造物のような不動産と仏像のような動産では対応が異なる事は言うまでも無い。さらに、地下に埋もれている埋蔵文

化財の場合も対応は異なることになる。

動産としての文化財の場合、重要なものは災害予防設備の整った宝物館に保存しておくことで赤タグと同じ扱いができる。これに対して、信仰の対象として文化財指定がなされていない秘仏、秘宝のようなものは、文化財行政担当者と文化財有識者、文化財所有者がよく話し合ったうえで、赤タグ扱いができるよう保存場所を明示した資材帳を準備しておくことが必要であろう。この際、問題となるのは大仏のように巨大で、容易に移動できない文化財である。これらは黒タグとして、不動産としての文化財扱いをせざるを得ない。また、宝物館自体が地震や火災の被害を受けないとは限らない。その場合、宝物館からのレスキューも視野に入れなければならない。

かつて、スプリンクラーなど防火施設が無かった時には、火災の際に寺社にある池が、緊急避難的に利用されたことがあるという。運び出す事のできる仏像などは池の中に投げ入れられることで最低限の防災が果たされたのである。実際、東寺など多くの寺社仏閣では、不動産にあたる寺社建築物は、江戸時代くらいに再建されたものが多い。しかし、その中に安置される仏像などは、その作成が平安時代までさかのぼるものも少なくないのである。これが観光客に京都＝平安時代というイメージを持たせる原因ともなっている。

5.3 不動産文化財のトリアージ

動産の文化財に対して、不動産のトリアージは非難させることができないと言う点から、その場所におけるレスキューを考えねばならない。そしてもう一つ再建の問題を考えておかざるを得ない。例えば京都の観光スポットのひとつ鹿苑寺金閣は昭和に再建されたものである。また、同様に観光スポットのひとつ清水寺の舞台は 16 世紀に再建されたものであり、京都のイメージシンボルのひとつ東寺の五重塔と同じ頃の建造物である。京都は、ここに都が造成されて以来しばしば大火に見舞われてきた。しかも、平安京がここに置かれて以来、平清盛の福原京遷都のごく短い時期を除いて都であり続けてきたために、常に新しい文化が海外から流入したり、新しい文化が創造されたりしてきた。このため、常に古い文化はごく一部を除き駆逐されてきたのである。

そして、明治になり都が詔の有無は別として東京へ移ると、大半の公家や大名は京都をさり、ここで文化が基本的に固定する。いわゆる京町家は、この時、時が止まった文化であり、近世後半から近代の建物である(図 8)。近年、この京町家を保存しようとする NPO などの活動がある。しかし、京町家のほとんどは耐震対策がとられておらず、火災にも極めて弱い。しかも京町家の多くは、幅 5.5m 以下の道路に面している。もし、仮に震度 7 程度の地震が発生すれば倒壊は免れる事は無い。しかも火事が発生すれば、現在の京都では五条通り、御池通り、堀川通りなどごくわずかな通りを除いて防火帯の役割を



図 8 京町屋

果たさない。しかも、そこに乗り捨てられた自動車が存在した際には、まるで役に立たなくなってしまう。また、阪神・淡路大震災の事例を鑑みると、幅 5.5m の道路は、倒壊してきた家によって完全に通行不能になる。以上のことを考慮すると、京町家はトリアージの下位におかざるを得ないといえよう。

5.4 京町家に保存されている文化財のトリアージ

ここで非常に問題になるのが京町家や会所と呼ばれる集会所に通常保管されている文化財である。祇園祭の際に飾られる屏風、山鉾などは前に述べた資材帳ができていれば、比較的救済しやすい。しかしながら、家ごとに所有している古文書、古絵図、骨董品の類は、資材帳の作成には膨大な手間と時間、それにそれを識別できる文化財有識者のマンパワーが必要である。これをどこまで進めるかは、文化財所蔵者、文化財行政担当者、文化財有識者の合意と熱意が必要である。

6. 文化財レスキューと人命救助の関わり

文化財レスキューは、災害で人の死なない街づくりを目指している筆者からすれば、優先順位が明らかに人命救助より下位に位置づけられる。この点は、絶対に譲れない点である。どんな立派な文化財であろうと人命には代えられない。

次に、文化財レスキューは、既に病院に入院している人々や、特別擁護老人ホーム、あるいは老人保健センター、保育園、幼稚園、小学校などように自分の判断ができない、あるいは自分で避難行動が取れない人たちのいる施設の人命救助と類似する点がある。イギリス王立病院では施設の不足から 80 歳以上のお年寄りの人工透析をしないとニュースが 2000 年に流れた。また、発展途上国における内臓移植をめぐる内臓売買の噂は絶えない。

トリアージ自体、緊急とはいえ「命の選択」という宿命を持っている以上、基本的に当事者の全てが納得できるものではない。どこまで、この考えを取り入れるかは、今後、十分な話し合いと合意の機会がもたれねばならないとおもう。